

資本論 第二巻 資本の流通過程  
 第一篇 資本の諸変態とそれらの循環  
 第五章 流通期間  
 第六章 流通費  
 第一節 純粋な流通費  
 1. 売買期間  
 2. 簿記  
 3. 貨幣

## 第五章 流通期間

- \*生産部面と流通部面の二つの段階を通る資本の運動
- ・資本が生産部面に留まっている期間は資本の生産期間である。
- ・資本が流通部面に留まっている期間は資本の流通期間である。
- ・資本の循環の総期間は、生産期間と流通期間の合計である。
- ・生産期間は労働過程の期間を包括しているが、生産期間は労働過程の期間に包括されていない。  
 (包括…一つに取りまとめること)

- \*不変資本の一部分は、機械や建物などの労働手段として存在しており、寿命の尽きるまで、絶えず繰り返し、労働過程で役だてられる。
- ・労働過程の周期的中断(例えば、夜間の中断)は、労働手段の機能を中断するが、それらが生産場所に留まることを中断しない。<機能中であれ、機能していないときであれ、生産場所に存在する。>

- \*一般に、生産手段の生産期間は、
  - (1) 生産手段として機能している期間
  - (2) 生産過程が中断され、(生産過程が中断されることによる)生産手段の機能が中断される中休み期間
  - (3) 生産手段が生産過程の条件として準備されていて、生産資本としてまだ生産過程に入っていない準備期間
 これら3つを包括する。

### 180頁 エンゲルス注

- \*ここでいう生産期間というのは、能動的な意味でのそれである。(能動的→自ら考えて積極的に物事に取り組む姿勢のこと)
- ・すなわち、生産手段の生産期間は、ここでは、それが生産される時間ではなく、それが商品生産物の生産過程に参加している時間である。
- \*生産が長期的に予定規模で進められるために、資本家は原料・材料の在庫を確保しておかなければならない。したがって、生産期間とその機能期間との差が現われる。
- ・この差は、生産資本が、生産部面に留まっている期間と生産過程に留まっている期間との差である。
- \*ところが、生産過程そのものが、労働過程の、労働期間の中断を必要条件とすることがありうる。
- ・労働対象が自然的過程の作用にまかされている中間期間が、それである。
- ・この場合には、労働過程は中断されているとはいえ、生産過程は続いている。
- ・例えば、畑にまいてある穀物、発酵させているぶどう酒、皮なめし業などの労働材料。
- ・この場合には、生産期間は労働期間よりも長い。
- ・二つの期間の差は、労働期間を超える生産期間の超過分である。この超過分は、生産資本が潜在的に生産部面にあり、労働過程にあることなしに、生産過程で機能する。
- \*潜在的な生産資本のうちで、ただ生産過程の条件として準備されてあるだけの部分(例・紡績業での綿花や石炭)は、生産物形成者、価値形成者として働いていない。
- ・この部分は、遊休資本である。(その遊休は、生産過程の中断されない流れの一条件をなしている。)
- ・生産用在庫(潜在的資本)の、貯蔵場所として必要な建物や装置などは、生産過程の条件である。→前貸資本の成分をなしている。準備段階での生産的諸成分の保管場所として、その機能を果たす。
- ・この段階で、労働過程が必要なかぎりでは、この労働過程は原料などの価格を高くする。生産的労働である。剰余価値を形成する。  
 (・この労働の一部分は、他の賃労働の一部分がそうであるように、支払われない労働だからである。)

- \*生産過程全体の「正常な中断」＝生産資本が機能していない「中休み期間」は、価値も剰余価値も生産しない。→それだからこそ、夜間も作業させようとするのである。⇒第一部第八章第四節
  - ・この部分は、遊休資本である。(その遊休は、生産過程の中断されない流れの一条件をなしている。)
  - ・生産用在庫(潜在的資本)の、貯蔵場所として必要な建物や装置などは、生産過程の条件である。→前貸し資本の成分をなしている。準備段階での生産的諸成分の保管場所として、その機能を果たす。
  - ・(労働対象が生産過程そのものの継続中に通らなければならない)労働時間の中休み期間は、価値も剰余価値も形成しない。(労働時間の中休み期間は、)生産物を助成し、生産物の生涯の一部をなし、生産物が通らなければならない一つの過程をなしている。
- \*種々の装置などの価値は、(それらが機能する全時間に比して)生産物に移される。(これらの装置の使用が生産の条件であるということは、その価値を生産物に移すのである。綿花の一部が塵となって、綿花の全てが生産物に含まれていないのであるが、綿花の全部の価値が生産物に移すことに、その価値を生産物に移すのである。)
  - \*建物や機械などの(生産過程の規則的な中休みによって機能を中断される)労働手段は、生産物形成に加わることなしに、価値をつけ加える。
  - ・つけ加える価値は、その平均耐用期間によって規定されている。この労働手段が生産物につけ加える価値は、労働手段が機能する時間中にも機能しない時間中にも使用価値を失うのであるから、この労働手段が生産物につけ加える価値を失うのである。
- \*最後に、労働過程が中断されても、生産過程にあることを続ける不変資本部分の価値は、生産過程の結果のうちに再現する。すなわち、労働は、つねに、生産手段の価値を生産物に移す。
- \*生産手段は労働吸収者としては機能していない。
    - ・生産期間が労働期間を超える原因がなんであろうと。
    - ・生産手段が、生産過程への前段階にあるからだろうと。
    - ・生産過程の中休みによって、生産手段機能が中断されているからだろうと。
  - \*労働を吸収しなければ、剰余労働も吸収しない。
  - ・それゆえ、生産資本がその生産期間を超える部分にあるあいだは、生産資本の価値増殖は行われないのである。
- \*生産期間は、つねに、資本が使用価値を生産しながら、自分自身を価値増殖し、したがって、生産資本として機能している期間なのである。
  - ・流通部面のなかでは、資本は、商品資本および貨幣資本として存在する。
- \*「資本の二つの流通過程」というのは、①商品の貨幣への転化(商品に合体されている剰余価値の実現)②貨幣の商品への転化(資本価値の生産要素への転化・再転化)という、流通過程としては単純な商品変態の過程であるということに変わりはないのである。
- \*流通期間と生産期間とは、互いに排除しあう。
    - ・資本は、その流通期間には生産資本としては機能せず、したがって、商品も剰余価値も生産しない。(総資本価値が、毎回一度に一つの段階から次の段階に移るという「最も単純な形態循環」みれば。)
    - ・資本の流通期間が続いている間は、生産過程は中断されており、資本の自己増殖も中断されている。
    - ・また、流通期間の長さに応じて生産過程の「更新」が速くなったり、遅くなったりする。
- \*これに反して、・総資本価値の循環が、その種々の部分の循環のなかで連続的に行われるとすれば、資本の別々の部分が、次々に、循環を通っていく。
  - ・資本の可除部分のどれかが、いつでも流通部面にとどまっている時間が長ければ長いほど、かわるがわる、絶えず、生産部面で機能している資本部分はそれだけ小さくならざるをえない。
- \*それゆえ、・流通期間の膨張と収縮は、生産期間の、または、与えられた大きさの資本が生産資本として機能する範囲の、収縮や傍聴にたいして、消極的な制限として働く。
- \*流通期間がゼロかゼロに近くなれば、それだけ多く資本は機能し、それだけ資本の生産性と自己増殖は大きくなる。
  - ・ある資本家が、注文に応じて作業し、生産物の引き渡しと同時に支払を受け、しかも支払が彼自身の生産手段でなされるとすれば、流通期間はゼロに近くなる。
- \*資本の流通期間は、一般に、資本の生産期間を制限し、資本の価値増殖過程を制限し、流通期間の長さに比例して制限する。
  - ・流通期間の長さは、非常に違った程度で増減することがあり、したがって、非常に違った程度で、資本の生産期間を制限することがある。

\*これまでの経済学は、資本は自己増殖の「神秘的な源泉」を持っていて、この源泉は、資本の生産過程にはかかわりなしに、労働の搾取にはかかわりなしに、「流通部面から資本のもとに流れてくるものだ」ということの証明を与えるものとしている。資本の増殖は、流通部面からなされるとした。

・流通期間が資本の価値増殖過程一般に及ぼす影響が、現象として現われる。

\*この外観は（資本の増殖は、流通部面からなされるということ？）、次のようないろいろな現象によって強固にされる。

- ① 資本家的な利潤計算の仕方。——より長い流通期間は、価格引き上げの原因として働く。
- ② 流通期間は回転期間の一つの契機であるにすぎない。回転期間は生産期間または再生産期間を含んでいる。生産期間のせいであることが、流通期間のせいであるように見える。
- ③ 可変資本（労賃）への諸商品の転換は、前もって、諸商品が貨幣に転化していることを必要条件とする。だから、資本の蓄積にさいしては、追加可変資本への転化は、流通部面から、流通期間中に行なわれるのである。

\*そのゆえ、追加可変資本への転化による資本の蓄積が、流通期間のおかげであるかのように見えるのである。

\*流通部面のなかでは、資本は二つの反対方向の段階を通る。 $W-G$  と  $G-W$  とを通る。（順序に違いはあっても。）

\*したがって、資本の流通期間も、二つの部分⇒資本が商品から貨幣に転化するために必要な時間・貨幣から商品に転化するために必要な時に、分かれる。

・ $W-G$ 、売りは、資本の変態の最も困難な部分である。→したがって、流通期間のうちの大きいほうのむ部分をなしている。

・貨幣は、価値の、いつでも転換可能な形態にある。

・商品は、価値の交換性・活動性を、貨幣への転化によって受け取らなければならない。

・ $G-W$  は、生産資本となる諸商品に転化することである。

・ $W-G$  と  $G-W$  が、時間的、場所的に分離されていることがありうる。（購買市場と販売市場が別々等）

\*売買しあう資本家たちが、この売買行為によって生産物も価値もつくりださないということは、流通担当者においても変わらない。「消費者から支払を受ける」は説明にならない。流通担当者は、生産担当者から支払を受けなければならないのである。

\* $W-G$  と  $G-W$  とのあいだの一つの相違は、生産の資本主義的な性格から生ずるものである。

・ $W-G$  も  $G-W$  も、ただ与えられた価値を、ある形態から別の形態へ移すだけのことである。

\*しかし、 $W-G$  は、同時に  $W$  に含まれている剰余価値の実現でもある。

・ $G-W$  はそうではない。だから、売りは買いよりも重要である。

・ $G-W$  は、 $G$  に表されている価値の増殖のためには必要な行為であるが、剰余価値の実現ではない。それは、剰余価値の生産の序論であって、その付録ではない。

\*商品資本の流通  $W-G$  は、商品そのものの存在形態によって、使用価値としての商品によって、一定の限界が引かれている。

・商品は、もともと、滅びるものである。

・商品は、一定の期間のうちに（それぞれの使命に応じて）生産的・個人的消費にはいらなければ、一定の時間のうちに売れなければ、だめになる。その使用価値を失う。交換価値の担い手という性質も失ってしまう。

・商品に含まれている資本価値も、剰余価値もなくなってしまう。

\*使用価値が、増殖する資本価値の担い手であるのは、絶えず更新され再生産され、新しい使用価値と取り替えられるかぎりである。

・再生産のための、絶えず更新される条件は、使用価値が一定の時間のうちに、その古い使用形態を取り替えて新しい使用形態で存在を続けることである。交換価値は、この更新によってのみ維持される。

\*商品資本の流通期間の限界は、商品資本が商品資本としてすごすことができる、流通期間の限界絶対的な限界である。

・商品がその物的性状（物の性質と状態）のため、商品としての流通期間の絶対的な制限が大きい場合、このような商品は、人口の多い地方、運輸機関の発達による地域的距離の短縮により、資本主義的生産の対象となりうる。ある物品の生産が、少数の手で、人口の多い地方に集中すれば、このような物品のために大きな市場がつくりだされることがある。例えば、大規模なビール醸造場とか酪農場などの生産物である。

## 第六章 流通費（純粋な流通費、保管費、運輸費）

### ※第一節 純粋な流通費

#### 一、売買期間

\*商品から貨幣へ、貨幣から商品への資本の形態変化は、資本家の取引であり、売買行為である。

・資本のこの形態転化の期間は、資本家にとって販売期間・購買期間であり、資本家が売り手、買い手として機能する期間である。

- ・資本の流通期間は、その再生産期間の必要な一節をなす。
  - ・売買期間は、人格化された資本として機能する期間の必要な一節をなす。営業期間の部分をなす。
- \* 諸商品が、その価値どおりに売買されると仮定されたのだから、売買の過程で行われるのは、ただ、商品形態から貨幣形態へ、そして、貨幣形態から商品形態への価値の転換⇒一つの状態変化である。
- ・諸商品が、その価値どおりに売られるとすれば、価値の大きさは、買い手の手にあっても、売り手の手にあっても不変であり、その存在形態が変化しただけである。
  - ・諸商品が、その価値どおりに売られないとしても、転化される諸価値の総額は不変である。一方のプラスは、他方のマイナスである。
- \* W-G および G-W は、買い手と売り手の「取引」である。
- ・このような取引がまとまるためには、時間が必要である。互いに、相手よりもたくさんもうけようとする闘いが行なわれる。事業家たちは、互いに対立しているので、「激闘」が始まり、ますます時間が必要となるのである。
- \* 状態の変化には時間と労働力が必要であるが、しかし、価値を作り出すために必要なのではない。一方の形態から他方の形態への価値の転換を引き起こすために必要なのである。
- ・この機会に乗じて、余分な価値量を取得しようとしても、もともとの価値量は少しも変わらないのである。
  - ・訴訟事件のために労働がなされても、それは、係争の目的物の価値量をふやすものでないのと同じである。
  - ・この労働は、熱を起すために用いられる材料の燃焼労働のようなものである。たとえば、石炭をガス化させる労働は、燃焼させるためには必要であるが、燃焼労働＝熱そのものを発生させるものではない。  
 < 石炭をガス化させる時、若干の熱は出るかもしれないが (?), 主として、ガス化されたものを燃やして、熱を発生させるのである。 >
- \* 商品所有者が（資本家でなく）直接の生産者であるなら、売買期間は労働時間には含まれない。
- ・産業資本家が、彼らから支払を受ける第三者にすることによっても、価値の形態変化の労働を、価値を作る労働に変ずることはできない。
  - ・地主の地代徴集人や、銀行の小使いの労働によって、地代の価値量や、銀行から運ばれる金貨の価値量が増えないのと同じことである。
- 192 頁 13 行目
- \* 資本家は、人の（労働者の）生産物をわがものとし、それを売り、再び貨幣から生産要素に、再転化せねばならない。
- ・売買期間は、価値を作り出さない。
  - ・< 商人資本の機能 >  
 買い手および売り手は、（彼の仕事によって）多くの生産者の売買期間を短縮しうるであろう。  
 無用な力支出を減ずる対象、または、生産期間の解放を助ける一つの機械と見られるべきであろう。
- 【注】 11
- \* 商業上の費用は、負担支出と見なされる。
  - \* 商人の報酬または利得の低減は「一番元の売り手と消費者である買い手」の利得の軽減である。
  - \* 生産物、富の増加が、商業によって得られることはない。
  - \* 商業上の費用は、つねに生産物の売り手によって負担される。
- 194 頁
- \* 売買担当者が自分の労働を売る人である場合。
- ・彼はこの仕事によって生活する。彼は他の者と同じように労働するが、彼の労働の内容は、価値も生産物作り出さない。< 彼自身が生産の空費に属する。 >
  - ・彼の効用—サービス、消費により得られる満足度—は、不生産的機能を生産的機能に、不生産的労働を生産的労働に転化させることにあるのではない。⇒この不生産的な機能に拘束されるということにある。
- \* 彼が、賃金労働者として、日々 8 労働時間の価値生産物を受け取って、10 時間働くとする。2 時間の剰余労働。8 時間の必要労働と同様に、価値を生産しない。
- ①一つの労働力が、10 時間、流通機能において消費される。
  - ②2 時間の剰余労働は、社会はこれに支払わない。
    - \* この「流通費」は、10 時間から 8 時間に、5 分の 1 減少する。
    - \* この流通期間の 5 分の 1 にたいして、「社会は等価を支払わない。」
- \* これを使用する資本家は、2 時間の不払いによって、彼(資本家)の収入から控除される「流通費」は減少する。  
 「彼(資本家)にとっては、これは、一つの積極的利益である。」
- ・資本家の収入からの「流通費」は減少は、彼(資本家)にとっての利益である。資本家の消極的価値増殖の制限が小さくなる。
  - ・資本家の収入からの「流通費」は減少⇒すなわち、「流通費」は、資本家の収入から支出されるのである。
- \* 小さな独立商品生産者にとっては、「流通費」は、彼ら自身の時間の支出においては、生産の合い間に行われるもの、あるいは、生産を中止して行われるものである。

195 頁 10 行目

- \*流通費は価値には付加されない。
  - ・諸価値を、商品形態から貨幣形態に転化するに必要な費用である。
- \*資本家的商品生産者が流通担当者であるとき、直接商品生産者と区別できるのは、大規模な売買、広範囲での動きとなるかである。
- \*資本家が、流通担当者を賃金労働者として雇用する場合。
  - ・労働力と労働時間は、流過程で支出されるが、これは、追加的資本投下である。
  - ・可変資本（流通における）、労働力の購入に投ぜられるのである。
- \*この資本前貸は、生産物も価値も作り出さない。
  - ・それは、前貸資本が生産的に機能する範囲を縮小する。
  - ・それは、生産物の一部分が、その残余の部分を売買する機械に転化されたようなものである。
  - ・この機械は、生産物からの一控除を引き起こす。
  - ・それは、流通で支出される労働力等を減じうるとはいえ、生産過程で働くのではない。
  - ・それは単に流通費の一部をなすにすぎない。

## 二、簿記

- \*簿記とは、経済取引によって生じる資産、負債、純資産の増減を管理し、(一定期間内の)収益と費用を記録することである。
- \*売買のほかに、簿記も必要となる。
  - ・ペン、インク、紙、机、事務所費が(純粋な流通費)に入る。  
簿記のために、労働力が支出され、労働手段が支出される。
- \* (当初はまず、) 資本は、計算貨幣で、商品生産者または資本家的商品生産者の(価格決定または価格計算を含む簿記によって)頭の中にある。
- \*頭の中で簿記を行うか、片手間にその支出、収入、支払期限等を記帳するにすぎない間は、この労働時間と労働手段は追加的表示となり、生産的に消費する時間と価値形成に入る労働手段からの一控除となる。大規模な機能となっても、範囲が拡大されても、これを委託された特殊な担当者の独立化されたものとなっても、この機能の性質は変わらない。

197 頁

### 【注 12】

- ・太古のインドの共同体においては、農業の簿記は存在した。そこでは、簿記係として共同体の労働力の一部が、生産から引き上げられる。
- ・この機能の費用は、共同体生産物からの控除によって補填される。
- ・資本家の簿記係のばあいも、インドの共同体の簿記係のばあいと同じことである。

198 頁 6 行目

- \*資本家が資本を投下するとき、彼は、一部を簿記係等の購入と簿記用品に投ぜねばならない。
  - ・再生産では、たえず簿記係等に、再転化せねばならない。
- ※そのばあい、生産過程から引き上げられ、流通費に属し、純収益からの控除に属する。

198 頁 11 行目

- ・とはいえ、一方の簿記に伴う費用または労働時間の不生産的な支出と、他方の単なる販売期間の費用とのあいだには、いくらかの違いが現われる。
- ・後者は、ただ、生産過程の一定の社会的形態から、すなわち、それが商品の生産過程だということから生ずるだけである。
- ・簿記は、過程の調整や観念的総括としては、過程が社会的な規模で行なわれて、純粋に個人的な性格を失ってくればくほど、ますます必要になる。
- ・したがって、資本主義的生産では、手工業経営や農民経営の生産分散的な生産でよりももっと必要になり、共同体的生産では、資本主義的生産でよりももっと必要になる。
- ・しかし、簿記の費用は、生産の集積につれて、また簿記が社会的な簿記に転化すればするほど、減ってくるのである。

199 頁 2 行目

- ・ここで問題にするのは、ただ単なる形態的な変態から生ずる流通費の一般的な性格だけである。
- ・そのあらゆる細かい形態に立ち入ることは、ここではよけいである。
- ・しかし、価値の純粋な形態転化に属しており、したがって、生産過程の一定の社会的形態から生ずる諸形態が、巨額な流通費として、人目を驚かすことになりうるといことは、単なる貨幣収支が、銀行などや個別事業の会計係の専有機能として、独立化され、大規模に集中されているのを見ればわかる。
- ・忘れてはならないのは、このような流通費は、その姿が変わることによって、その性格を変えるものではないということである。

## 三、貨幣

- ・生産物は、個人的消費または生産的消費に入る、使用価値である。
- ・商品としては、生産物の価値は、価格において観念的に存在する。

- ・金銀のような商品が、貨幣として機能する。
- ・生産物の大部分が商品として生産され、貨幣形態を採り、商品量が増大するのだから、(流通手段、支払手段、予備費としての) 金銀の量も増加する。
- \*貨幣として機能するこれらの商品は、個人的消費にも、生産的消費にも入らない。
- ・貨幣は、社会的労働が、流通の道具として一形態に固定されたものである。
- ・貨幣の磨損は、その不断の補填を必要にする。(資本主義の発達した国では、貨幣形態に拘束されている富の部分が大きいので、この補填費が大きい。)
- ・貨幣商品としての金銀は、生産の社会的形態から生ずる流通費を形成する。それは、商品生産一般の空費であって、商品生産、資本主義的生産の発展とともに増大する。
- \*それは、流通過程に捧げられねばならない社会的富の一部である。

**【注 13】**

- ・一国内に流通する貨幣は、その国の資本の一定部分であって、自余の部分の生産性の促進または増加のために、生産的目的から完全に引き上げられている部分である。
- ・それゆえ、金を流通手段として採用するために一定量の富が必要であるのは、他の何らかの生産を容易にするための機械を作るのに、それが必要であるのと同じである。